

◆平成 24 年度 第 5 回 (通算第 31 回) 蔵前ゼミ 印象記◆

日時：2012 年 10 月 22 日 (月)

場所：すずかけ台 J221 講義室

形にとらわれない

伊藤夏香 (1994 有機材料, 96 MS) 弁理士, 蔵前工業会 平成卒業生の会 幹事

「名前が変わった時に、顧客から『ご結婚おめでとうございます』と言われて戸惑いました」と、時々プライベートを交えながらの話は、それだけでも十分に聞く価値があった。実は旧姓に戻った時のことを伊藤さんらしく表現したのだ。伊藤さんは「今日の話は反面教師にしてください。」と言ったが、幼い娘と一緒に離婚までの精神的苦しみを乗り越えて、何とか弁理士として生計を立て、今ではセミナーや講演会の講師をするまでになった経緯は、これから仕事を見つけ、伴侶を探し、子育てをし、社会と複雑につながっていかようとしている学生には大いに参考になったに違いない。「再婚は？」との質問に、「再婚ですか。それは悩みますね。」というくだりが、人間味があって何とも言えなかった。「蔵前ゼミ」といっても講義の一端ゆえ、そういう質問には答えられませんがと逃げることもできたはずだ。どんな質問にも誠心誠意答える。「娘が大きくなるまでは今のまま・・・、それまで待ってもらえるかどうか・・・」。最後のつぶやきに秘められた思いに、今回の本題ではないが、「形にとらわれない」女性の生き方や恋愛があり、人生を豊かにしているのだとしみじみ思った。

聴衆と向き合う姿で思い出すのは著名な女流ピアニストだ。私がまだ筑波大学にいた頃だから 25 年以上も前の話になる。町の中心部に立派なホールを備えた筑波センタービルが完成し、記念にコンサートが開かれた。このいきさつからわかるように、聴衆は混成となる。音楽愛好家もいれば、そうでない地元のオジさんやオバさんもいる。時々セキやクシャミをするだろうし、曲の区切りが分からないので、ピアノが静かになれば（曲の途中で）拍手をする。このようなイベントでは許容範囲と思うが、そのピアニストには我慢がならなかったらしい。途中で演奏をやめて東京に帰ってしまったのだ。

女優さんのケースも記しておこう。私が入学して間もなくの工大祭の目玉として吉永小百合コンサートが開かれた。講堂横のスロープに学生が手作

りした（みすばらしい）舞台の上で、終始にこやかに会場を盛り上げてくれた。工大生の多くがサユリストになった。対照的にとでもいおうか、すずかけ祭ではこんなことがあった。売出し中の女性タレントに来てもらったまでは良かったが、会場を見るなり帰ってしまったのだ、「私をコケにする気？」といわんばかりに。問題の会場は今のパーベキュー広場で、以前はコンクリート製の調整池（大雨の時に一時的に雨水をため洪水を防ぐための池）だった。小劇場の形をしていて、大雨が降らない限り、立派な舞台として使えた。実際、すずかけ祭のメイン会場として長年使われてきていた。それなのに調整池という表示を見ただけで、芸を披露せずに帰ってしまったのだ。いや、「醜態」という寸劇を披露したのかもしれない。彼女の場合はしばらくして名前を見聞きしなくなった。最近の例では、都庁担当記者の質問に「それは愚問だ」といって怒りをあらわにし、評価を下げてしまった長老もいる。記者も人の子だ。頭ごなしにされれば「長男が総理になれなかったからの旗揚げか」と書きたくもなろう。

伊藤さんが掲げる「形にとらわれない」は、徹底的に形を追求した結果として生まれたようだ。「形にとらわれない」の対極にあるのが形を重んじる日本舞踊だ。その日本舞踊を 6 歳から始めた。名古屋で鋳物工場を営む祖父の勧めだったが、しだいにその虜となり、大学を決める頃には日本舞踊の師匠の近くに住んで、大学に通うかたわら、思う存分に稽古に励みたいと思い詰めるまでになっていた。日本舞踊の世界では、通常ずっと同じ師匠に師事する。伊藤さんの祖父が惚れ込んだ師匠は東京の下北沢の人だった。大学受験を機に住み慣れた名古屋を離れ、師匠のいる東京で暮らすことにし、そこから通える範囲で大学を探した。鋳物の仕事をしていた父親の影響で材料科学に興味があったので、本学が候補になった。東京工業大学はきとおまけだったはずだが、なんと学部 2 年次までに有機材料工学科で研究室に入るまでに必要な講義の単位をすべてそろえ、残すは卒業

研究だけとしてしまった。こうなると3年次は暇だ。日仏学院に通ってフランス語を勉強した。中学生の時にフランスで踊ったりしたことなどもありフランスには親しみがあつたようだ。このアクティブなところが若さを保つ秘訣のようだ。

4年次の卒業研究では、夜中の2時ごろまで実験をすることが多くなった。日本舞踊の師匠宅（下北沢）の近くということで梅ヶ丘に下宿していたので、その時刻では電車がな。バイク通学で乗り切ったのだが、もともと旅好きだったこともあって、休日にも、オフロードバイクに乗ってツーリングに出かけるようになった。バイク以外での旅行も含めると、大学院終了までに全都道府県に行ったそう。日本舞踊家がバイクで全国制覇？と不思議な気がしたが、よく聞いてみると、なるほどと納得した。おしとやかなイメージが強い日本舞踊だが、舞台の衣装は十キロ以上となる場合もあり、しかも中腰なので、実際にはかなりハードで、すごく筋肉を使うそう。一つの舞台を終えると過呼吸寸前の状態というから衣装との格闘技なのだ。いくら衣装を着こなすこととバイクを乗り回すことには相通じる点があるとしても、卒論を抱えての両立は無理だろうと思ったが、学部在籍中に日本舞踊での芸名をもらい、さらに大学院在籍中に難しい師範試験（踊りの腕前のみならず、踊りの背景となっている古典の知識も問われる）にパスし師範免状を手にした。意外づくめの展開だったが、後で伊藤さんは（学部1年生のときは朝5時に起きて1限の前にパン屋でアルバイトしてから登校していたこともあるほど）睡眠時間が少なくてすむらしいと聞いて納得した。

古典に疎い会場の雰囲気を感じて、伊藤さんは深入りをしなかったが、今年から11月1日が「古典の日」になったことでもあり、伊藤さんが紹介した日本舞踊の演目の1つの「汐汲み」に登場する在原兄弟について調べてみた。行く先々で恋に落ちるのだからさぞ嫌われ者かと思いきや女性に意外と人気があるようだ。在原行平（ありわらのゆきひら）は政変で須磨に流され、そこで潮汲みをしていた二人の姉妹と出会い恋に落ちる。姉は松風（まつかぜ）、妹は村雨（むらさめ）といった。やがて行平は二人を残して都に戻ってしまうが、姉妹はいつまでもいつまでも去っていった行平の帰りを待ち続けたのだ。弟の在原業平（ありわらのなりひら）は百人一首でおなじみだが、物事にとらわれず奔放だったことでも有名だ。それゆ

え宮中で数々の浮名を流した。歌の才能と浮名の微妙なバランスが女性には魅力的なのかもしれない。

伊藤さんが業平のファンだったからかどうかは聞きそびれたが、後に娘さんを生んだ時に住んでいた家は、「業平橋」の袂で、そこには東武伊勢崎線の業平橋（なりひらばし）駅があった。（秋に生まれた）娘さんの名前は業平の歌『ちはやふる かみよもきかず たつたがわ からくれないに みづくくるとは』（紅葉に映える龍田川の美しさを読み上げた一首）の「神」の枕詞に因んで“ちはや”（千颯）にした。ところが、東京スカイツリーが出来て、駅名が「業平橋」から「スカイツリー駅」に変更になってしまった。伊藤さんには（娘の名前の由来の駅名が変わって）ちょっとショックだったようだ。

さて、日本舞踊をしながら修士課程に進んだ伊藤さんは、就職を考える時期となった。ここで人生の岐路（研究 vs 日舞）に立ったはずだが、いとも簡単に「日本舞踊は老後の楽しみにとっておくわ」とセラミックスのノリタケに勤めることにしたのだ。師匠を慕って上京したはずが、大岡山に足を運ぶうちに伊藤さんの心の中で何かが変わったとすれば、本学の魅力も在原業平に勝るとも劣らないのではと嬉しくなった。東工大のキャンパスは昔から SciTech Fountain（科学技術の泉）と言われてきた；この泉が枯れない限り日本は大丈夫だとも。伊藤さんの経歴を聞きながらそんなことを思い出した。

就職面接の話に会場がどよめいた。伊藤さんはノリタケの他にA社も受けていた。そのA社での面接だ。（ほかに受けている会社として応募書類に書かれている）ノリタケとうちと両方合格したらどちらに行きますか？と問う面接官に、「申し訳ありませんが、もしノリタケに受かったら、そちらに行きます」と正直に答えたのだ。超がつく就職氷河期だったから（大卒の就職率61%）、マニュアルに従えば「はい、貴社が第一希望です」と答えなければならない。面接担当者は当惑したに違いない。後に、A社の担当者はノリタケの人事課の知り合いに会ったとき、伊藤さんの採否を教えてもらった。伊藤さんは入社後、人事部の人からの話でそのことを知ったそう。 「A社の面接でうちに行きたいと言ってくれたんだってね。うれしかったよ。」と言われたのだ。日本舞踊を極めたよう

な人、あるいはゲーム理論をマスターした人でないといけない芸当なので、一般的にはお勧めできないが、書き残しておきたくなるエピソードだった。

来客のときに活躍するのがノリタケの洋食器だ。日本が誇る世界のブランドの一つでもある。折から、大岡山の百年記念館内の博物館で特別展示「東工大で益子焼」(2012.10.17~28)をやっていたので器の話は絶妙なタイミングだった。ノリタケは、食器の製造で1904年以来100年以上にわたって培ってきた技術をもとに、研磨剤やセラミックス原料、さらには電子ペーストなどの部材も提供し、太陽電池や環境エネルギー技術を支えている。伊藤さんは電子ペーストの開発に携わった。電子ペーストというと難しそうだが、電子部品用の導電体・絶縁体・誘電体などをペースト(乳剤)状にしたものだ。入社当時の写真を見せてもらったが、にこやかで高校生のような伊藤さんが印象的だった。会社ではチームの一員として仕事をした。上司だった中山さんという方の話になり、「偉くなっても、白衣を着て実験室にいつも入っているような方で、こういう人の頼みだったら、どんなつらい実験でもしちゃうだろうと思うような人でした」と声をつまらせた。そんな尊敬する上司のリーダーシップのおかげであろう。伊藤さんたちの研究も順調に進み、発表した論文は表彰された。なお、後で聞いたことだが、表彰のレセプションのときフランス語で話しかけたことがきっかけで知り合ったフランスの研究者の人とは今ではお互いの娘同士も一緒になって家族ぐるみの関係だそうだ。

その後、結婚・育児を経て、次の会社で発明の明細書を書いて出願する仕事をするようになった。その会社は自分たちで書いて直接出願する方針だった。拒絶された場合の反論を含めて、自分たちでしなければならない。ここで培われたセンスが、グレーゾーンの出願でも、特許庁の審査官とのやりとりを通じ特許にする方向へと全力を注ぐ伊藤さんの強みで、顧客の信頼が厚いゆえんだ。国語も得意だったそうだから伊藤さんの文章も分かり易いのだろう。分かり易いといえば、私より2年先輩の田中光彦(生産機械1968)の文章はお奨めだ。原子炉の設計に関わった後、サイエンスライターとして今も活躍中ゆえ、田中さんの本を一冊手に入れ手本にしてほしい。

特許に関するすべての仕事を法律の知識がないまま進めるのは不安を通り越して恐怖だったようだ。そこで、特許の勉強を始めることにした。弁理士を目指すことにしたのだ。長い道のりを一人で歩むには強い精神力が必要だが、くじけそうになった時には仲間の励ましで前に進むことができるので、ゼミに参加して仲間を作ったそうだ。子供が寝てから、灯りの漏れない場所にこもって勉強する日が続いたこともあった。そして家族の支えもあって2004年に血のにじむような努力が報われた。

この後、数年経って、伊藤さんは離婚することになった。このとき難局を切り抜けられたのは、一つには娘さんが離婚への背中を押してくれて支えてくれたおかげと聞いて、新潟県の民話に出てくる親孝行な娘の話の思い出した。ご褒美にAO入試で東工大に入れてあげたいほどだ。伊藤さんが弁理士として、この世界でやって行こうと決めたのは、白と黒だけでなくグレーがある世界で面白いと感じたからだ。誰が見ても白(特許性あり)と黒(特許性なし)が分かる出願でなく(意見の分かれる)グレーとされるものを特許としても認めてもらう。お客さんに喜んでもらえ、感謝され、頼りにされれば、達成感がこみ上げてくる。誰もがみな自分の好きなことを仕事にしているわけではないのに、自分は好きな仕事をさせて貰ってとても幸せだと、伊藤さんは後でそう話していた。

伊藤さんの話を聞いて弁理士になろうと思った学生もいたに違いない。そういう人には是非読んで欲しいのが伊藤さんが弁理士になった時の所信だ。「パテント」58巻(2005年)第3号75頁に掲載されている(下記サイト)：

http://www.jpaa.or.jp/activity/publication/patent/patent-library/patent-lib/200503/jpaapatent200503_075-075.pdf

伊藤さんの場合は明細書作成のみをするのではなく、ぐるなびでは知財のしくみづくりに携わり、また自治体等では相談会を通じて多いときでは年に200人近くの相談に応じるほかに、時間を作っては社会とのかかわりを持つようにしている。小・中・高校で知財の授業をしたり、区主催の知財セミナーで講師を務めたりと忙しい。伊藤さんは「国内出願は少し減っています。」と言っていたが、交流会に出席した学生の中には複数人の弁理士志望がいたそうだ。「顧客(リピーター)をつか

むのは、専門のことをよく勉強していて、勝てる特許を書いてくれる弁理士で、誰でも というわけではありませんよ」と、司会の坪田さんが補足した。やはり、勉強好きで、文章を書くのが苦でない人でないと苦勞するようだ。「形にとらわれない」という意味では、伊藤さんが教えている小学5年生の知財教室での発明コンテストが印象に残った。彼らの発想は驚くほど柔軟で、次から次へとアイデアがわき出てくるのに驚かされるそうだ。私たちにもそういう時代があったのに……今はどうだろう……という雰囲気会場に流れたところで、アイデアの話（主題）になった。本学の卒業生を考えると、これまで話してきた弁理士になる人は例外で、多くは新商品・新技術の開発に関わるゆえ、そういう人たち（ステレオタイプの東工大卒）の参考になる話もしなければという配慮だ。

技術者には2種類あるのではないかと伊藤さんは考えている。着想のできる人（発明家タイプ）と発展・展開が得意な人（アレンジ型）だ。伊藤さんは自分自身をアレンジ型だと分析している。世の中には両方が必要ゆえ、自分の得意とする力を発揮すればよい。どちらにしても、新商品・新技術を開発しようと思うと、資金・人・設備・アイデアがいる。弁理士の立場から見るとこのアイデアについての調査が重要らしい。1-2年程かけて“新製品・新技術”を開発し、特許を出願したとする。しかし出願は拒絶される場合も少なくない。伊藤さんが引用した、ある年のデータによると、拒絶査定となった出願の半数近くが、出願より2年以上前に公開されている文献を引用されていたそうだ。特許文献は特許電子図書館（IPDL）で誰でも無料で調べることができる。伊藤さんではないが、「お金と労力の無駄を防ぐためにも、研究開発を始める前に特許電子図書館IPDLで是非公開情報を調べてほしい！」と言いたくなる状況だ。企業に勤めたらIPDLだ。それに、IPDLはアレンジ型の人にとってはアイデアの宝庫でもあるし、ニッチに気付くこともできる。自分は発明家タイプだと思う人もIPDLを活用しよう。

越後製菓の特許を侵害しているとされた「サトウの切り餅」製造差し止め判決の話（詳細はインターネットにゆずる。）やそこから派生して伊藤さんが言及した先使用権関連の話も勉強になった。多額の損得につながることもあるのだから、実験ノートには必ず日付を入れて記録し、できれば第3

者のサインをもらっておこう（生協で特許対応の東工大版実験ノートが売られている）。

伊藤さんは、人との関わりを通して、自分の殻（限界と思い込んでいたこと）を打ち破り、また自分の長所に気づきそれを生かしてきた。自分には到底できないと思っていたことでも、チャンスが与えられれば、チャレンジしてきた。今こうして教壇に立っているのも、人との関わりで与えられたチャンスを生かそうと思ったからだ。人との関わりで成長できることに感謝しながら、伊藤さんは次のように結んだ：

これから社会へ出る皆さんへ
人と違っていい。それが武器になることもある。
形にとらわれないで
「自分にとって」良いと思える道ならば
前に進もう！
やってみよう！

質疑応答の時間も30分とたっぷりあったので、その一部も記しておこう。弁理士は（締め切り内であれば）自分のペースで仕事することも可能だ。極論を言えば、インターネット環境とパソコンが一台ありさえすれば外国にいても出願はできるらしい。仮に子供が横で泣いていてもインターネット経由での出願自体には問題ないそうだ。将来（パートナーの）転職についていかなければならないかもしれない人にはお勧めとのことだった。但し、勉強好きでないと駄目らしい。法令が毎年変わるからだ。弁理士になるまでの勉強も大変だが、弁理士になっても勉強はズート続く と聞いて心配になったのか、最後にはこんな質問も出た「ひょっとしてそれが離婚の原因とかではないですよね」。「ああー」（とうとう聞かれたか）という伊藤さんの「悲鳴」がタイミングといい、イントネーションといい、とにかく絶妙で（アカデミー賞主演女優賞！）、囚らずも会場がどっと沸いた。全く関係ないと聞いて安心したのか、やりとりはこう続いた「ということは、男性にとって、弁理士の奥さんというのは結構お褒めなんですね」。「そうか、そういう目では見たことなかったですね。そのとおりかもしれないですね。ある程度 技術の話も分かってくれるだろうし、万が一 クビになっても その奥さんが食べさせてくれると思うし…」。さすが都区市内での知財セミナーの講師や発明コンクールの審査員長として引っ張りだこなわけだ。こうして自然に、ゼミから交流会へという雰囲気

になった。大役を果たした伊藤さんにとってもビールが美味しかったに違いない。

(生命理工学研究科 生体システム専攻 教授 広瀬茂久)